

III 共同利用研究

1. 概 要

研究所においては霊長類に関する共同利用研究を公募により行ってきたが、昭和55年度からはこれを「一般共同研究」と名づけ、新たに霊長類研究所教官の企画による「計画共同研究」を加えることとなった。したがって昭和55年度共同利用研究の募集は「1. 研究課題」と「2. 研究会課題」とに大別し、前者についてはさらに「一般共同研究」と「計画共同研究」とに分けて行った。一般共同研究の公募は、昭和52年度より開始された下記4設定課題とそれらに該当しない研究のための自由課題について行われた。

1. 研究課題

A. 一般共同研究

I 設定課題「群れの統合機構に関する研究」

ニホンザルの群れは、どのような社会機構によって統合されているのかという問題を、広範な視点より研究し、従来の社会構造論を再検討し、新たな社会構造論の構築をめざす。

スパーシング、グルーピング、リーダー・フォロワー関係、血縁関係、順位の成立と構造、性・年齢による社会的役割、オスとメスの生活史、コミュニケーション、カルチャ等、さらにオスとメスの群れからの移出入、コミュニティに関する問題等が研究対象となる。

II 設定課題「各環境構造における霊長類の適応機序の解明」

霊長類には多様な適応・放散がみられるが、各環境構造との対比において、霊長類の適応の機序を解明しようとするものである。

本課題においては、環境利用と生活様式、群れの遊動の様式、個体群動態、ロコモーション様式、地域個体群の諸特性、温度適応等に関する生理学的研究等のテーマが考えられ、これらのテーマを霊長類の生態学・形態学・生理学的手法を用いて、野外及び実験室において広く追究する。

III 設定課題「霊長類の成長・発達」

個体の成熟する過程にみられる諸変化を、

生理・行動・形態の側面から多角的に追求する。例えば、受精のメカニズム、性周期、出産期、身体の発育、神経系の発達、行動の発達等の問題をとりあげる。

IV 設定課題「霊長類の系統・種分化・種の特性に関する研究」

霊長類の系統や種の諸特性を明らかにし、さらに種分化の諸機構を分析する。系統や種の同定と分化機構の形態学的分析、種内の集団構造や地域集団間、あるいは種間の系統的相互関係を解明する社会学的および遺伝学的研究、生体成分の構造・機能・代謝系を解明する生化学的研究などを行う。

V 自由課題（設定課題に含まれない研究課題）

B. 計画共同研究

計画共同研究は、共同利用研究のなお一層の推進をはかり、霊長類学の総合化に寄与することを目的に企画されたもので、霊長類研究所の教官が計画、推進、まとめの中心となり、本研究所外の研究者を含めたグループにより遂行される研究計画である。

これらの研究課題について50件（103名）の応募があり、運営委員会共同利用研究専門部会（伊澤紘生、糸魚川直祐、久保田競、水原洋城）および共同利用研究実行委員会（竹中 修、室伏靖子、田中二郎、松波謙一、小山直樹、松澤哲郎）の合同会議による原案を協議委員会（昭和55年2月14日）の審議によって決定され、運営委員会（昭和55年2月29日）に報告し了承された。

その結果35件（76名）が採択され、各課題についての応募採択状況は次のとおりである。

課 題	応 募	採 択
I	6 件（9名）	4 件（5名）
II	6 件（9名）	5 件（8名）
III	11 件（19名）	9 件（17名）
IV	9 件（21名）	8 件（20名）
V	15 件（28名）	8 件（18名）
計 画	3 件（17名）	1 件（8名）

2. 研究会課題

研究会課題に関しては従来からの研究会をも含めて設定課題ごとに対応する研究会に整理統合する方針で募集し以下の8件が採択された。

1. 課題Ⅰ「群れの統合機構に関する研究」
2. 課題Ⅱ「各環境構造における霊長類の適応機序の解明」
—そのとらえ方と意義—
3. 課題Ⅲ「霊長類の成長・発達」
—発達段階を考える—
4. 課題Ⅳ「霊長類の系統・種分化・種の特性に関する研究」
—生化学的レベルの研究を中心にして—
5. 「第8回行動研究会」
—攻撃性の調整—
6. 「第7回脳と行動研究会」
—感覚情報処理と階層性—
7. 「第10回ホミニゼーション研究会」
—チンパンジーをめぐる諸問題—
8. 「哺乳類の初期発生に関する研究会」

(竹 中)

2. 研 究 成 果

設定課題 1.

群れの統合機構に関する研究

木曾山系に連続分布をするニホンザルの群れのグルーピングに関する研究

田 中 進

1980年4月から1981年3月までの調査で次の3点が特徴的かつ興味深い現象であった。

- (1) 倉本群(K群)の冬期の利用地域は、標高の低いところよりむしろ高いところであった。
- (2) 隣接する2群が出会うことは稀れであったが、出会った際、群れ間にトラブルはみられなかった。
- (3) 群れの上空約100 mをクマタカ(天敵?)が旋回したが、ほとんどの個体は林内にいて何らのトラブルも起らなかった。ただ、オトナオス(尾を上げていた)と5~6才のオスの2頭は林外にいた。

以上の3点について以下若干の補足を加える。

1月から2月にかけて、K群はそれまでよく利用していた標高1100 m以下の地域をほとんど遊動しなくなった。ただし沢筋は利用していたと考えられる。冬期に標高の低い地域をあまり利用しなかった要因として次の5点が考えられる。①冬期は猟期であり、特に低標高の地域にはハンターや猟犬が入山している。②標高の高い地域でも積雪量はそれほど多くなく、標高1100 m地点で約40 cm(1981年2月)である。サルにとって生活する上で支障になるとは考えにくい。③標高の高い地域でも比較的食物となる植物は豊富である。④二次林を含む自然林が標高に沿って連続分布しており、生息地として適当な地域が標高の高いところにもある。⑤元来K群の遊動域は標高の高い地域であった。しかし、②と③については調査年のみに特異的にみられた事象かもしれない。

群れと群れとが出会った際、一方の群れの個体しか警戒音を発しなかった。

天敵であろうといわれているクマタカと群れが相遇する瞬間を観察できたが、群れ内に混乱もしくは緊張がみられなかったのは、ほとんどの個体が林内にいたためと思われる。